

耕 起

ウシの家畜化は、最も古い家畜であるイヌ、そしてヒツジとヤギに次いで古く、今から 8,000 年程前に西部アジアで行われたと考えられています。大型の動物を家畜化するには困難が伴ったと考えられ、その動機については、宗教儀礼など古代人の精神世界が影響を与えたとする説がある程度受け入れられています。しかし、最も古いウシの家畜化の証拠とされ、多くのウシの角や頭部が神殿に納められていたアナトリア高原のチャタル・フユク遺跡においても、ウシの家畜化を機に野生動物の骨が出土する割合が減少しており、その主要な目的が食料であったことに疑いはありません。

ウシを用いた^{すき}犁の登場は、6,000 年程前のメソポタミア文明に遡ることができます。ウシが家畜化される前に既に営まれていた原始的な定住的農耕が定着し、人口が増加して食糧増産の必要に迫られたのでしょう。やがて、馴化が進んだ家畜牛が引く犁が考案されるに至ります。

ウシは首付きが低いことから、首を下げると「き甲」と呼ばれる肩の最も高い位置で横棒をひかせることができます。長く伸びた犁の引棒の先端に横棒が取り付けられ、その両端は2頭のウシの各々の肩に結び付けられました。農業における牛耕の導入は、牛糞を肥料として利用することと相まって、耕作面積と農作物の収穫量を飛躍的に増大させることになります。メソポタミア、エジプト、インダス、黄河流域などに出現した古代文明はいずれも小麦、大麦を主とする穀物と牛耕^{ぎゅうこう}を基盤として成立しており、人類が「ウシの役利用」と「作物を個体ではなく全体として管理する種子農耕」を知ったことは、人類文化史上の重大な出来事でした。ちなみに、ウマの家畜化は、5,000 年程前です。大地を耕して、私たちの食糧を増産し、文明と文化を育んだのはウマではなくウシだったのです。

切手を見てみると、インドでは二頭引きの牛犁で畑を耕していることがわかります。夏が作期であるモロコシやトウジンビエなど雑穀が主作物であり、土壌を深く耕し、雑草を根っこから取り除くためにやや頑丈になっています。

水田稲作地帯における牛犁の利用も東南アジアにおいては2頭引きが普通です。1945 年にビルマ（現ミャンマー）で発行された 3.6 バーミーズアナ切手では、馬^{まんが}鋤^{しろかき}をひいて代掻きをしている様子が描かれています。田んぼの土を細かく碎き、舞い上がった土が沈殿することで水漏れを防ぐ効果があるほか、水田の表面を平らにすることから、苗が均等に育つといった効果があります。代掻きの前に行う牛犁による耕起と併せて、除草の効果も期待されます。

大日本帝国郵便、ビルマ郵便切手と日本語で記された切手に2頭のウシが犁を引いている様子が描かれています。昭和 30 年代まで行われていた日本の牛耕は1頭引きなので、そのころを知る

人には、違和感があるのではないのでしょうか。この切手を説明するには、戦争について触れなければなりません。日本は、昭和 16 年(1941)12 月 8 日の真珠湾攻撃により開戦すると、東南アジアの国々に侵攻して占領しました。この時期に日本軍によって発行された切手は、南方占領地切手と呼ばれており、その地域の文化も図案として採用されています。2頭引きの牛犁は、異国の文化を実感する情景だったのではないのでしょうか。

アジアで一頭引きの牛耕が描かれているのは、タイ、ラオス、台湾の切手です。中でも台湾で 1958 年に発行された 0.20~3.00 ドルの4種の切手は、スイギュウで行われていることを除けば、かつて日本で行われていた1頭引きの牛耕そのものです。大洋州のニューカレドニアとパプアニューギニアから発行された小型切手シートは香港で開催された切手展に合わせて図案化されたものです。

欧州の図案は、その多くが2頭引きですが、ベルギーの5+5フラン切手に描かれた牛犁は、4頭のウシが引いています。牛犁が考案された西アジアの乾燥地帯では、耕起の目的は播種と保水にありましたが、ヨーロッパは湿潤で土壌が重く、雑草が生えやすいことから、深耕して除草する必要がありました。そのため、牛犁は、車輪が取り付けられた^{じゅうすき}重犁に改良され、中世にはウシを数頭^{くびき}頸木につないだ^{れんちくすき}連畜犁となり、広大な麦畑の耕作が行われました。こうした変化の延長線上に現在のトラクターがあり、1946 年に発行されたルーマニアの 400+1600 レウ切手は、そのことを象徴するデザインとなっています。

アフリカでは、植民地時代に導入されたヨーロッパと同じタイプの牛犁が描かれています。肉や乳などの畜産物を与えてくれるだけでなく、穀物の増産に貢献し、私たちの文化を花開かせたウシは、まさに家畜の代表といえるでしょう。